

たがみ 田上の七不思議

茨城県内には親鸞聖人のご旧跡が数多く伝えられる。しかし、ここはそれらと趣違い、お堂や石碑などの遺跡はく、吾国山の麓、稲田川の源流に近く、石垣の多く残る沢地区のびとによって「田上の七不思議」と呼び伝えられてきた、親鸞聖人の伝説である。

この伝説は、地元の郷土史に詳しい能島清光氏が、土地の長老に聞き取りし、本にまとめられてる。『笠間の文化財読本』その能島氏にご案内いただき、消えかけていた七つの伝説が残る土地を訪れることが出来た。

①「不動坂の三度栗」

不動坂は沢地区の入口に位置し、当時は険しい峠道であった、その道の脇に、聖人が越後からお持ちになった栗の木を植えられた。その木は下から三回に分け花と実をつけたと伝えられる。周辺には山栗の木が多く見られる。

②「お経塚」と ③「お経の松」

不動坂の分岐から沢方面へ50メートルほど緩やかな坂を登ると、左手に敷石ある山道が見えてくる。そこを20メートルほど登ると、左手の林中に高さ1メートル、直径5メートルほどの円形の塚があり、「経塚」と呼ばれている。

当時、村では疫病が流行っていた。そこで度々通りかかる聖人に祈禱を願った。すると聖人は、この塚に上がり、お念仏の教えを説かれ、「ふんどめの池」

の水で墨を擦り、経文を書いて塚に埋めた。教えにであい、よろこんだ村人は塚の上に目印の松の木を植え、それを「お経の松」と呼んだという。数十年前まで松の大木が、ここに立っていたそうである。

④「ふんどめの池」

お経塚の近く、民家のわきにある栗畑の奥の山際に、2メートルほどの小さな池がある。

「田上の七不思議」所在地



①不動坂の三度栗



②御経塚 ③お経の松



④ふんどめの池

聖人は暑い夏の日、水を求め民家もなく、困り果てていた。そこで、お念仏を称えながら右足地面に踏み込むと、冷たい水が湧き出し、喉を潤した。足を踏み込んでできた池なので「ふんどめ池」と呼ばれるようになった。隣接する家の方の話では、息子さんの産湯に、この水を使ったそうだ。現在も、澄んだ水が絶え間なく湧いている。

⑤「おび石」

山から谷へ一直線に大きな石が露出し、帯状に並ぶ所がある。これを聖人が「おび石」と名付け道の目印にされたと伝えられる。



⑤おび石の一つ「味噌石」
高さが2メートルほどある



⑦さいねん坊坂



⑥八つ房の梅

⑥「八つ房の梅」

聖人は山越えの往来の時、度々民家に一夜の宿を願うことがあった。その時に植えられた木が、八重の花びらで、実はひと枝に三つしか付けない梅の木であったという。当時の木はずでに枯れたが、となりの椿地区に三代目の木が今でも花をかせていた。

⑦「さいねん坊」

沢地区の西側に、丘陵地が広がっている。そこに聖人の直弟子ある西念房が僧坊(庵)を結んだと伝えられている。

西念房は、ここで静かにお念と共に暮らしていたが、歳を取り亡くなると、お堂はいつしか荒果てた。しかし、雨のしとしと降る晩には誰もいないはずのお堂から、かすかにお念仏やお経を読む声が聞こえてきた。村の人びとは西念房がお念仏の教えを広めるため、いつでも、ここでお念仏やお経を読み続けているのだと思ったという。また、親は子どもがいたずらなどをすると「ぼんざかごろり」と言って、そ



古道の周辺には古い石碑などが多く点在している

の丘から集落に下る「さいねん坂」を、西念房の火の玉が転がってくると戒めたそうだ。

さいねん坊跡は、さいねん坊の東側という説と、丘陵地北側墓地という二つの説がある。

親鸞聖人が稲田におられた頃、たびたび鹿島へ赴かれていたため、その街道筋には数多く、聖人の御旧跡が残されている。この伝説残る沢地区は、稲田と板敷山を結ぶ古道沿いにある。

当時の土地の人々は、聖人が道を通られるたびに、お念仏の教えを頂いたことだろう。そののであいが時が経つにつれて形を変え、伝説となって残されてきたことに、古の昔、聖人と土地の人々の間に、深い交流があったことが裏打ちされているように感じる。